

女性用風俗で再会した年下の担当者に、
クンニで何度も絶頂させられた夜

第一話

名前を打ち込んだ夜

朝、真帆はキッチンでコーヒーを淹れながら、テーブルの端に置いたスマートフォンへ視線を落とした。六時五十分。今日は午前から、外部委託先との進捗会議が入っている。昨夜のうちに資料は一通り読み込んであり、どこを詰めるか、どこを差し戻すかも、頭の中ではもう整理がついていた。

背後で椅子を引く音がして、夫がダイニングに座る。

「今日、梨絵さんと会うんだっけ」

「うん。仕事のあと、そのまま」

「じゃあ夕飯はいらないな」

「そっちは？」

「たぶん会社で済ませる。遅くなるし」

味噌汁の湯気が、二人のあいだをゆっくり上がりっていく。

気まずきはない。荒れてもいない。必要なことを確認して、互いに予定を共有して、一日を始める。結婚して十年近くになる夫婦としては、むしろ落ち着いている方なのだろうと思う。

ただ、その落ち着きの中には、もう長いこと、女としての自分が入り込む余地がなかった。

夫がご飯を一口食べてから、思い出したように言う。

「そうだ。昨日、母さんから電話があつてさ。今度の日曜、実家に来られないかって」

「何かあるの？」

「エアコンの業者が入るらしい。午後から工事で、終わるまでいてほしいんだって」

「けっこうかかるのね」

「たぶん夕方まではかかるんじゃないかな。終わったら、そのまま晩飯も食べていけって言われてる」

「そう」

「真帆は来なくていいよ。日曜くらい、家でゆっくりしてたら」
夫に悪気はない。気を遣った、ごく普通の言い方だった。
だからこそ、胸のどこかに小さく引っかかる。

ゆっくりしていたら。

その言葉はやさしいはずなのに、同時に、自分がもう生活の中の“きちんとした妻”としてしか扱われていないようにも聞こえる。

た。

役に立つこと。段取りがいいこと。任せておけること。

そういう評価には慣れている。むしろ、それでここまで来た。仕事でも家庭でも、「ちゃんとしている人」として見られることに異論はない。

けれど最近、ときどき思う。

自分はもう、そういうふうにしかな見られていないのではないかと。

「じゃあ、行ってくる」

「行つてらっしゃい」

閉まったドアの音を聞いてから、真帆はマグカップを持ったまま、しばらくキッチンに立っていた。

鏡に映る顔は、いつも通り整っている。寝不足にも見えないし、疲れても見えない。そう見せるのは得意だった。

そう見せてきたから、ここまで来られたのだとも思う。

でも、その顔を、誰かに“女”として見られたのは、いつが最後だっただろう。

考えかけて、やめた。

そういうことを朝から考えるのは、らしくない。

会議室の空気は少し冷えすぎていた。

真帆が席に着くと、部下たちの姿勢がわずかに正される。気のせいではない。彼女は厳しいと言われているし、その自覚もある。曖昧な確認で時間を使うくらいなら、最初から要点を絞って詰め

た方がいい。そういうやり方で実績を積んできた。

「では、第三フェーズの進捗からお願いします」

向かいに座っていた早瀬が、資料を開いた。

「はい。まずサンプル設計の見直し案からご説明します」

落ち着いた声だった。

三十一歳。調査を委託している外部会社の担当者で、ここ数年か

月、定例会議や差し戻した資料の再提出のたびに何度も顔を合わせてきた相手だ。社内の人間ではない。けれど案件の実務では、真帆が要求し、早瀬がそれに応じて精度を上げていく場面の方が圧倒的に多く、距離感だけなら半分こちらのチームのようだった。

そのわりに、早瀬は変に媚びない。若いのに報告は簡潔で、言い訳が少ない。必要なところでだけ言葉を置く。その落ち着きがただの愛想ではなく、仕事の癖なのだと真帆にもわかっていた。

説明が終わると、真帆はすぐに資料の一点を指した。

「この補正だと、三十代後半の回答がまだ薄いですね。前回も同じ指摘をしました」

「はい。そこは二案用意しています」

「二案あるのはいいですが、自由回答との整合が弱いです。このままだと、数字だけが浮きます」

部下たちの空気がわずかに固くなる。
真帆は構わず、資料から目を上げた。

「この案件、そこがいちばん重要です。読みやすく整える前に、まず筋を通してください」

「承知しました」

早瀬は表情を変えなかった。

「自由回答の分類軸を切り直して、補正後の傾向と並べて見せます。先に論点メモも出します」

「いつまでに出せますか」

「三日いただければ」

「わかりました。先にメモだけ今日中にもらえますか」

「はい」

短いやり取りだった。

けれど真帆は、その返しの速さに、今日も小さく感心していた。叱られても慌てない。自分を守るための言い訳を足さない。その代わり、次に必要なものだけを返してくる。

会議が終わり、真帆が席を立とうとしたところで、早瀬がメモを一枚差し出した。

「久住さん、先ほどの件、補足をまとめました」

真帆は受け取り、ざっと目を通す。

こちらがまだ口にしていない懸念まで、半歩先で整理されていた。会議の最中にここまで書いたのだとしたら、かなり頭の回転が速い。

「……ありがとうございます」

それだけ言うと、早瀬は軽く会釈した。

「何度もご指摘いただいている点なので。先に手を入れた方がいいと思います」

何度も。

その言葉に、真帆はこの数か月を一瞬で思い出した。差し戻した資料、夜遅くの再提出、オンライン会議での静かな応酬。自分が厳しく詰めても、この男は感情を乱さず、ただ次の正解に近づ

いてきた。

仕事の場で、よく知る相手だった。

男として意識したことは一度もない。だが、外部の会社に所属しているにもかかわらず、ここ数か月はまるで自分の案件チームの一員のように動いている相手だとは思っていた。

それくらいには、距離が近かった。

その夜、真帆は学生時代からの友人・梨絵と駅近くのバーにいた。

平日の夜にしては静かな店で、照明も暗すぎない。仕事の付き合いでも家庭でもない相手と話す時間は、思っている以上に気が抜ける。

「で、相変わらず忙しいわけね」

「まあね」

「顔見ればわかる。疲れてるっていうより、張りつめてる」

「褒め言葉として受け取っておく」

梨絵は笑ってグラスを傾け、それから少しだけ声を落とした。

「旦那さんとはどう？」

真帆はすぐに答えなかった。

こういう聞き方をするのが、梨絵らしい。

「普通」

「その『普通』って、だいたい何か足りてない時に使うやつよね」

真帆は苦笑した。

「……まあ、否定はしない」

「女としての欲って、なくなっただけじゃないでしょ？」

その言い方は露骨なようでいて、実は核心だけを突いていた。真帆は氷の溶けかけたグラスを見つめたまま、少しだけ間を置いてから答える。

「なくなったわけでは、ないかな」

「でしょうね」

「でも、別にどうしようもないし」

「ひとりで済ませるのも限界あるじゃない」

真帆は肩をすくめた。

「慣れた、とは思う。けど、楽しい話ではないわね」

梨絵の表情が少しだけやわらいだ。

そこまで言えれば十分だった。真帆は性の話を何でも打ち明けるタイプではない。けれど、完全に閉じるほどでもない。梨絵相手なら、事実を短く返すくらいはできる。そのくらいの温度の方が、彼女らしかった。

「レス、長いんでしょ」

「三年くらいになるかな」

「やっぱり」

「そんなに得意そうに当てないで」

「得意じゃないわよ。ただ、あんたがそういうの全部、自分の中に押し込んでそうだから」

梨絵は昔から遠慮がない。

その代わり、踏み込んだことを聞く時は、相手の顔色もちやんと見ている。

「だったら、なおさら一回くらい行ってみれば？」

「何に」

「女性用の会員制サロン。私が入ってるところ」

真帆は眉を寄せた。

「……いわゆる女性用風俗？」

「言い方としてはそう。でも、ギラギラした店じゃないの。高級マンションの一室で、完全予約制。会員制だから変な客層もないし、登録情報も最低限。セラピスト以外に会うこともない」

梨絵は、年会費、施術料、指名料のことまで具体的に話した。真帆は最初、半分は聞き流すつもりでいた。だが、匿名性が高いこと、会員制であること、無理なことはしないと梨絵が言い切ったこと、そのあたりが妙に現実味を持って残る。

「一回くらい、いいんじゃない？」

「私が？」

「そう。あんたみたいに普段ずっと主導権握ってる人ほど、ああいう場所は向いてると思う」

「何それ」

「だってそうでしょ。仕事では指示する側、家でもちゃんとしてる側。そういう人って、誰かに任せるのが下手なのよ」

真帆は否定しようとして、できなかった。

誰かに任せろ。そういう言い方をされると、少しだけ心が動く。梨絵はグラスを置き、少しだけ声を落とした。

「あ、でも表向きはちゃんとしてるからね。サイトにも本番行為はしませんってはっきり出るし、そういうのを店側から勧める感

じじゃない」

真帆は眉を寄せる。

「じゃあ、そこまでってことでしょう」

梨絵は、意味ありげに少しだけ笑った。

「表向きは、ね」

「……どういう意味？」

「客の方が個別にお願いして、あとはセラピストとの空気次第、
ってことはあるの」

真帆はすぐに返事ができなかつた。

梨絵はさらに声を落とす。

「私は、あつたわ」

その一言が、妙に静かに落ちた。

「もちろん最初から当然みたいに求めるのは違うし、相手も選ぶ店のサービス外だから、誰とでも、いつでも、って話でもない。でも、絶対じゃないわけじゃない」

「……ずいぶん危ない話をするのね」

「危ないから、あんたに言ってるの。最初から軽い気持ちの子なら、逆に向いてないわよ」

梨絵は真帆に向き直る。

「別に恋愛しろって話じゃないの」

梨絵はグラスを置き、少しだけ真面目な顔で言った。

「まだ自分が女だったって、思い出すだけでも違うわよ」

その言葉は、軽く聞き流せなかった。

まだ女だった。まるで、今の自分はそうではないみたいな言い方だ。けれど反発できないのは、自分でも同じことをどこかで思っていたからかもしれない。

帰り際、梨絵はスマートフォンを操作しながら言った。

「URL送るね。あと、事前シートあるから、変に真面目に答えすぎないように」

「答える前提なのね」

「そこに“呼ばれたい名前”の欄があるんだけど、適当なニックネームでもいいの。でも、本名で入れた方が、思ってる以上にぞくつとするわよ」

「何それ」

「そういうものなの」

真帆は呆れたように笑ったが、その一言だけは、妙に耳に残った。

その夜は登録しなかった。

翌日も、その次の日も、送られてきた「E」を開いては閉じ、開いては閉じた。馬鹿げていると思う。四十歳にもなって、何をし

ているのだろうかとも思う。

それでも金曜の深夜、夫が寝室で寝息を立てたあと、真帆は一人でリビングに残り、もう一度サイトを開いた。

画面は拍子抜けするほど簡素だった。

住所も勤務先も不要。必要なのは会員用のメールアドレスと決済情報だけ。梨絵の言っていた通り、個人を特定する情報は驚くほど少ない。

会員登録のあと、空き枠が表示される。

最短で取れるのは日曜午後だった。

日曜午後。

夫は実家へ行くと言っていた。夕方までかかって、そのまま晩飯を食べて帰るかもしれない。そう考えると、時間としては現実的だった。

現実的。

そんなふうに考えている自分に、真帆は少しだけ嫌気がさした。もっと単純に、あり得ない、と切り捨てればいいのに。そうしないで、行ける時間帯かどうかを先に計算している。

しかも、頭のどこかには、梨絵が最後に言ったことが残っていた。

表向きはしない。けれど、絶対に何もないとは限らない。

そんなことまで考えている時点で、自分はもう十分におかしい。そう思うのに、画面を閉じる指は動かなかった。

ここで閉じれば終わる。

こんなものを開いたことごと忘れればいい。

それなのに、指先は予約ボタンの上で止まりながら、結局、離れなかった。

予約完了の表示が出た瞬間、心臓が一度、大きく跳ねた。

取り消そうかと思った。実際、そのまま数分、画面を見たまま動けなかった。けれど削除もキャンセルもせず、送られてきた事前シートのURLを押してしまう。

もう後戻りしづらいところまで、自分で来てしまっている気がした。

事前シートの項目は、思っていた以上に細かった。

性的嗜好

S寄り／M寄り／どちらでもない

主導権

攻めたい／攻められたい／相談したい

口での愛撫

あり／なし

口でしてあげる行為

あり／なし

言葉責め

あり／なし／軽めなら可

拘束

あり／なし／軽めなら可

達しやすさ

イキやすい／普通／イキにくい

そして、その下に自由記入欄が続く。

呼ばれたい名前

セラピストに満たしてほしいこと

苦手なこと・避けたいこと

画面の下には、小さめの文字で注意書きも出ていた。

※本サービスでは、法令に反する行為および本番行為は行いません。

その一文を見た瞬間、真帆は一度だけ指を止めた。

止めたのに、閉じなかった。梨絵の言葉が、また頭の奥でよみ

がえったからだ。

——表向きは、ね。

それを期待しているわけではない。

そう自分に言い聞かせても、完全に切り離すことはできなかった。

真帆は画面を見つめたまま、しばらく指が動かなかった。

ただ選ぶだけの項目なのに、ひとつひとつが、自分の奥にあるものを他人にも読める形にしていくようで息苦しい。

最初は、できるだけ曖昧にしておこうと思った。

「相談したい」や「軽めなら可」で逃げれば、少しはましな気がしたからだ。

でも、ここまで来てまだ取り繕うのか、とも思う。

誰にも見せていない欲を、名前も知らない誰かに預ける。その時点で、もう十分に逸脱していた。

真帆は、ゆっくり選んでいく。

性的嗜好 .. M寄り

主導権 .. 攻められたい

口での愛撫 .. あり

口でしてあげる行為 .. あり

言葉責め .. あり

拘束 .. 軽めなら可

達しやすさ .. イキにくい

そこまで入力しただけで、体の内側が熱くなった。

ただの選択肢に過ぎないのに、自分が何を望んでいるのかを、誰かが読める形で並べていく感覚がひどく生々しい。

次の欄は、呼ばれたい名前。

最初は仮名を入れるつもりだった。実際、一度別の名前を打ちかけた。

だが、その瞬間に梨絵の声がよく見える。

——本名で入れた方が、思ってる以上にぞくつとするわよ。

真帆は打ちかけた文字を消した。

数秒迷ってから、自分の名前を入力する。

真帆

たった二文字なのに、それを画面で見た瞬間、急に現実味が増した。

これは遊びではない。少なくとも、自分にとってはそうではない。そんな気がした。

最後の欄、セラピストに満たしてほしいこと。

ここには長く何も書けなかった。性欲を満たしたい、とだけ書けば済むのかもしれない。けれど、それだけではないことを、自分がいちばんよく知っている。

真帆は息を整えてから、少しずつ打ち込んだ。

普段は指示する側で、気を張っている時間が長いです。

今日は主導権を預けたいです。

顔を見られたままの体勢が恥ずかしいです。

視線を逸らせないようにされたいです。

恥ずかしい姿勢でも逃がさないで、言葉で指示してほしいです。

丁寧に、時間をかけて口で触れてほしいです。

必要なら、口で応じることに抵抗はありません。

ただ、雑に扱われるのは苦手です。

書き終えた瞬間、胸の奥がどくと鳴った。

ここまで具体的に書くつもりではなかった。なのに一度書き始めると、止められなかった。

こんな文章を、誰かが読む。施術の前に、きちんと読む。そう思うだけで喉が熱くなる。

送信ボタンを押すまでに、また数分かった。
押したあともしばらく、呼吸が整わなかった。

画面を閉じたあとも、自分が打ち込んだ文章だけが、まぶたの裏に残っていた。

日曜の昼前、夫は予定通り実家へ向かった。

真帆は玄関先で「行つてらっしゃい」と見送り、ドアが閉まったあと、しばらくその場から動けなかった。

家の中は妙に静かだった。

リビングの時計の音だけが、いつもよりはっきり聞こえる。あと一時間ほどで家を出れば間に合う。まだキャンセルはできるのではないか。そう思って予約完了メールを開きかけ、結局また閉じた。

クローゼットの前に立ち、何を着ていくかで数分迷う。

派手すぎるのは違う。かといって、いかにも気合を入れたように見えるのも嫌だった。結局、落ち着いた色のワンピースに薄手のコートを選んだ。鏡の前でピアスを変え、口紅を引き直す。その一つひとつが、誰かに見られに行く支度のように落ち着かない。

家を出る直前まで、真帆は何度も立ち止まった。

バッグを持って玄関に立っても、靴を履いても、ドアノブに手をかけても、まだ引き返せる気がした。

それでも外へ出た。

駅までの道が、今日は妙に長い。

日曜の昼下がりの街は平日より柔らかい空気なのに、自分だけがその流れから外れている気がした。電車を待つ数分でさえ、胸の内側がざわつく。乗り換えのたびに、やめようかと思った。改札を出たところで一度、スマートフォンの予約画面を開き、キャンセル方法を探しかけた。だがそのたびに、ここまで来て今さら、と別の声がある。

指定されたマンションは、都心の静かな住宅街にあった。

派手さのない高級感。エントランスは整いすぎていて、むしろ冷たいくらいだ。真帆は建物の前に立ったまま、しばらくその外観を見上げていた。

ここで帰れば終わる。

誰にも知られずに終わる。

会費も施術料も無駄になるが、それだけだ。

それなのに、指先は暗証番号を押していた。

エレベーターの中で鏡に映った自分の顔は、少し強張っていた。唇の色がやけに濃く見える。四階で扉が開き、指定された部屋番

号までの短い廊下を歩く数歩さえ、ひどく長かった。

部屋の前に立つ。

予約確認メールの部屋番号と、表札のないドアを見比べる。間違っていない。

指先が冷たい。

インターホンに手を伸ばして、直前で止めた。心臓の音が自分でもうるさい。押せば、本当に始まる。知らない男が出てきて、自分の名前を呼び、自分がシートに書いたことを前提に接してくる。

そのはずだった。

真帆は一度だけ目を閉じ、それからボタンを押した。

短い電子音。

返事はない。

その代わり、内側で足音が近づいてくる。床を踏む音が、妙に鮮明に聞こえた。

鍵の開く音がして、真帆の喉がひりついた。

ほんの数秒のはずなのに、その間だけ時間が引き伸ばされたように長い。

ドアが開く。

真帆は、息を止めた。

目の前にいたのは、見知らぬセラピストではなかった。

平日の会議室で向かいに座っていた男。資料を差し出し、「久住さん」と静かな声で呼んだ相手。ここ数か月、何度も顔を合わせ、何度もやり取りを重ね、そのたびに仕事の精度をぶつけてきた相手。

早瀬もまた、ドアノブに手をかけたまま固まっていた。

互いに、すぐには声が出なかった。

目の前にいるのが本当に本人なのか、真帆は一瞬わからなくなつた。

けれど、見間違えるはずがない。スーツではなく私服でも、会議室の白い照明の下ではなく柔らかい灯りの玄関先でも、この数か月で見慣れた顔だった。

数秒。

あるいはもつと長く感じる沈黙のあと、早瀬が先に、かすかに声をこぼした。

「……久住さん」

名字で呼ばれたことで、かえって現実になった。

職場の延長ではないはずなのに、目の前にいるのはたしかに、あの会議室にいた男だった。

真帆は唇を動かしかけて、うまく声にならなかった。

喉が乾く。指先が強張る。逃げたい。今すぐ帰りたい。そう思うのに、足が動かない。

ようやく絞り出した声は、かすれていた。

「……どうして、あなたが」

早瀬は一度だけ目を伏せ、すぐに答えた。

「本業とは別です。ここは日曜だけ、不定期で入っています」

それでも、意味が頭に入ってこない。

日曜だけ。不定期で。兼業。そういう言葉が、現実感のないまま耳に触れては落ちていく。

真帆の視線は、早瀬の顔から逸らせなかった。

この数か月、会議や打ち合わせで何度も向かい合い、まるで自分の部下のように接してきた相手だ。その相手が今、自分をこの場所で迎えている。仕事では一度も見せたことのない顔を、見られるに違いない場所で。

早瀬が先に口を開いた。

「今日は中止にできます」

真帆は瞬きをした。

「え……」

「こちらの事情でキャンセル扱いにします。会員情報も来訪記録も、外に出ることはありません」

落ち着いた言い方だった。

動揺していないわけではないはずなのに、声だけは乱れていない。そのことが、真帆を余計に追い詰めた。

もし彼がもっと狼狽えていたら、こちらも怒って帰れたかもし

れない。

もし気まずそうに謝られたなら、それを理由に打ち切れたかもしれない。

けれど彼は最初に逃げ道を差し出した。

選ぶのはあなたです、と言わんばかりに。

「……事前シートも」

真帆は喉の奥で言葉を探した。

「見たんですか」

「はい。担当者が施術前に確認する決まりです」

その瞬間、全身が熱くなった。

M 寄り。攻められたい。口でしてあげる行為あり。言葉で指示してほしい。丁寧に、時間をかけて口で触れてほしい。必要なら、口で応じることに抵抗はありません。

画面に打ち込んだ文字が、全部、この男の目に触れている。夫にも知られていないことを。

職場では一度も乱れたところを見せたことのない相手に、もう読まれてしまっている。

早瀬は続けた。

「ただ、続けないのであれば、それ以上はここで終わりです」

玄関脇に半歩、身を引く。

部屋の奥にはやわらかい灯りが見える。品のない空気はない。ホテルのように整っていて、逆に現実味が薄い。

「外での仕事に持ち込むつもりもありません」

真帆はうまく息ができなかった。

こんな場所で、仕事のことを言われるとは思わなかった。

「忘れられますか」

口にしてから、それが問いになっていないことに気づく。
忘れてほしい。ただ、それだけだ。

早瀬はごまかさなかった。

「忘れることはできないと思います」

真帆の肩がぴくりと揺れる。

「でも、口外はしません。あなたが望まない限り、ここで知ったことを外で扱うこともありません」

曖昧に慰めないところが、この男らしかった。
だから余計に、恥ずかしさが逃げ場を失う。

真帆はバッグの持ち手を強く握った。

何か言わなければと思うのに、言葉にならない。自分がシートに書いたことが、頭の中で勝手に反復される。呼ばれたい名前の欄に、本名の「真帆」と打ったことまで、この男は知っている。それだけで足元がぐらつくような気がした。

早瀬は、急かさなかった。

沈黙を埋めようとしなない。ただ、真帆が逃げ道を選ぶならそれを止めないという顔で立っている。その態度が、かえって残酷だった。

ここで帰れば、明日からまた何もなかった顔ができる。

会議室で資料を開き、彼は説明し、自分は指摘する。そうやって元に戻るはずだ。

でも、本当に戻るのだろうか。

あのシートを書いた自分を、なかったことにして。

主導権を預けたいと、目を逸らさずに見られたいと、丁寧に口で触れてほしいと、必要な口で応じることに抵抗はないと、そこまで書いた自分を。

真帆は目を伏せたまま、ようやく唇を開く。

「もし……続けると言ったら」

早瀬の視線がまっすぐこちらを向く。

「その場合でも、無理はさせません。嫌だと思った時点で止めます。今日はあなたがお客様です」

「そんなふうに切り替えられるんですか」

「切り替えます」

即答だった。

「少なくとも、私はそのつもりでここにいます」

真帆は唇を結んだ。

この男は押し切らない。強引に流しもしない。最後まで、決めるのは自分だと突きつけてくる。

だから逃げられない。

「……帰るのが正しいんでしょうね」

「正しいかどうかは、私が決めることはありません」

「でも、……帰れないとも思ってます」

言った瞬間、足元が揺れた気がした。

ここまで来たからではない。金が惜しいからでもない。見られなくなかったものを見られてしまったからこそ、その先へ少しだけ進みたくなっている自分がいる。

夫には見られないままだった女の部分を。

仕事では絶対に出さない欲を。

よりによってこの男に見抜かれたことが、恐ろしくて、少しだけうれしかった。

早瀬が低く尋ねる。

「私が担当しても、よろしいですか」

真帆は声にならないまま、かすかに頷いた。

早瀬は一拍置いて、静かに言う。

「……言葉でお願いします」

喉が熱い。心臓がうるさい。

それでも真帆は目を逸らさなかった。

「……早瀬さんで、お願いします」

「承知しました」

その一言で、空気が変わった。

早瀬はドアを閉め、内鍵をかける。大きな音ではないのに、真

帆にはひどく重く響いた。

「まずは、お荷物をお預かりします」

仕事の間と変わらない敬語なのに、意味だけがまるで違う。
バッグを差し出す指先が、わずかに震えた。

「緊張していますか」

「……していないように見えますか」

「見えません。だから、確認しました」

その返しに、真帆は一瞬だけ息を漏らすように笑った。ほんの短い反応だったが、それで張りつめていた肩の力が少し抜ける。

部屋の奥へ案内される。

落ち着いた香り。やわらかな灯り。低いソファと、整えられたベッド。すべてが清潔で、余計なものがない。

「最初に確認だけします」

早瀬はソファの前で立ち止まり、真帆の方を見た。

「無理なことはしない。嫌だと思った時点で止める。途中でも何度でもです。シートの内容は希望として扱いますが、絶対ではありません」

真帆は小さく頷く。

こうして一つずつ言葉にされるほど、現実になっていく。

「それと」

早瀬は少しだけ声を落とした。

「ここでは、無理にしっかりしていなくて大丈夫です」

その言葉が、予想以上に深く刺さった。

真帆は知らないうちに詰めていた息を、ゆっくり吐き出す。

早瀬が膝をつく。

視線の位置が下がっただけなのに、なぜか主導権を握られた気がした。

「今日は、あなたが書いたことを、ひとつずつ確かめます」

その声を聞いた瞬間、真帆はわかった。

まだ何も始まっていないのに、もう後戻りできないところまで来てしまっているのだと。